

六月四日、田園風景の続く札沼線を走ること一時間余り、中小屋駅で下車する。ここ月形は星野フサ氏の生まれ故郷。当地に住まう星野氏の兄君大江明雄氏が、笑顔で出迎えてくれ、現地の案内もしてくださるとのこと。感謝。怪しい空模様だが、一同月ヶ湖目指して出発した。

農道の両側は一面の水田で、天候のせいかさほど高くない所から雲雀のさえずりが聴こえる。原先生が、道端や用水路の植物をひとつひとつ丁寧に説明して下さる。ミツバベンケイソウ、ヤナギトラノオ、クサレタマなど、今までさして気にも留めず見ていた植物、何度か伺ったはずの事柄なのに、初めて見た時のような感動を覚えたり、大きく頷いたりしてしまう。しかし、花より団子という言葉があるではないか。セリはもう遅いようだが、おびただしい数の笹を付けているセイヨウヤブイチゴは9月上旬あたりかと、稔りの季節を想像してにんまりしているところへ雨がぽつぽつ、ぱらぱら。雨具を来て、鼻を吸いながらも前進あるのみ。濡れた緑が、色鮮やかに輝く。大江氏の手配で、採算に見合わない経営だということカソリック系老人ホーム「藤の園」の集会室を拝借して、お喋りしながら昼食を摂る。シスターの歓迎の挨拶を受け、ここでも感謝。心は温もり腹は一杯で外へ出ると、雨はかなり小降りになっていた。「いやぁ、たいしたことありませんよ、大丈夫ですよ」原先生の太鼓判で勇氣百倍。

アズマナルコ、ヒメシラスゲ、ピロウドスゲ。小樽から御参加の松木氏が、道タイネ科とカヤツリクザ科の特徴や、オギとススキの見分け方を話して下さる。

原先生の教えてくださったイヌスギナ。スギナよりもたおやかで、茎の先に付く胞子のう穂が愛らしく、強い印象を受けた。

とこうしているうちに月ヶ湖に着いた。竹や草を刈った水辺沿いの遊歩道を歩く。樹々の葉が、メモをとるノートにあるかなしかの緑色の陰を落ととしている。見上げるといつの間にか雨は止み、

雲間から薄陽が射していた。固いマットのような泥炭の感触に心が弾むが、ぼんやりしていると水溜りを踏んだり切り株に足を取られてしまう。茎の伸びたオオバタチツボスミレの残り花、オオカメノキは緑色の実になっている。洪水のように花畑を駆け抜けた春が過ぎ、風は初夏の訪れを謳歌しながら湖面を渡って行く。岸辺に生えているのは、マコモか。その向こうにヒシ、コウホネ、ヒツジグサなどが水面にたゆたっている。対岸の茂みのあたりに野鳥の親子がいる。双眼鏡で覗くと、頭から真逆様に潜り、暫くしてとんでもない所にゴム毬のようにぽこんと顔を出し、ひとつ身振りすると胸を張って泳いで行く。

湖に生くほんのひとまたぎの川に架けられた木橋を渡ると、急に視界がひらけた。ツルコケモモ、ヒメジャクナゲ、ウメバチソウ、モウセンゴケ、タテヤマリンドウなどが地面を被うお花畑だ。楚々としたタテヤマリンドウは花の盛りで、とりわけ心を惹かれた。

コンクリートジャングルの中で日々を過ごしている者にとって、ここは贅沢なまでの自然に囲まれているように思われるが、星野氏の御幼少の頃は、季節になると湖に限らず一面にキスゲやノハナショウブの花が咲き散いて、モウセンゴケもいたる所に生えていたという。開拓当時の苦勞は想像を絶するものだったろうし、客土や暗渠で耕地面積が増え機械化が進んだ現在でも、ことに積雪期は難儀なことだろう。

名残りは尽きず列車の時刻は迫りで、大江氏の好意に甘え駅まで送っていただく。オープンカーの上は歌でも出そうな爽快さだ。荷台の縁に掴まったり隣の人の腕にしがみついたりして、にぎやかなことこの上ない。高い視点で眺める水田は広く感じられる。目を閉じて、黄や紫の花がいったいのスクリーンを重ね合せると、原野の風景がよみがえるような気がする。まさに猫の手も借りたい繁忙期に、まる一日を割いてくださった大江氏に感謝しながら、月形に別れを告げた。